



脱原発世界会議2012YOKOHAMA 報告書

■企画タイトル	閉会イベント さあ、始めよう
■日時	1月15日(日) 18:15~19:30(75分)※会議プログラム上 18:25~19:55(90分)※実際の企画時間
■場所	1Fメインホール
■企画参加人数	約1,000名超
■文責	室井舞花(ピースボート)

◆プログラム

司会:脱原発世界会議実行委員
川崎哲/ピースボート共同代表
早水綾野/グリーン・アクション

【オープニング映像】

ショートフィルム「Blind」 監督:ショウダユキヒロ

【成果発表】

- 原発のない世界のための横浜宣言

吉田明子/脱原発世界会議実行委員、国際環境NGO FoE JAPAN

- 原発のない世界をつくる 一行動の森

佐藤潤一/脱原発世界会議実行委員、国際環境NGO グリーンピース・ジャパン事務局長

【会議・成果発表へのコメント】

- 上野千鶴子/東京大学名誉教授、NPO法人ウイメンズアクションネットワーク(WAN)理事
- 宮台真司/社会学者、映画批評家、首都大学東京教授
- 海渡雄一/日本弁護士連合会事務総長
- 山本太郎/タレント、俳優
- 野中ともよ/NPO法人ガイア・イニシアティブ代表
- アバッカ・アンジャン・マディソン/マーシャル諸島共和国元上院議員

【つぎの行動へ】

- 東アジア脱原発・自然エネルギー311宣言

チェ・ヨル/環境財団代表

飯田哲也/脱原発世界会議実行委員、環境エネルギー政策研究所所長

吉岡達也/脱原発世界会議実行委員長、ピースボート共同代表

- 地方自治体から

松谷清/静岡市議会議員

- ふくしまから世界へ

須藤栄治/つながろう!南相馬

ミランダ・シュラーズ/ベルリン自由大学環境政策研究所所長、比較政治学教授

◆企画の中でどんなことが発表されまた話し合われたか

オープニングで上映した「Blind」(=目をつむるという意味)は、私たちに現実から目を背けていいのか?と問いかけています。この閉会イベントは、2日間行われたこの会議の熱気をただのお祭りごとで終わらせるのではなく、一人一人が持ち帰ることのできる会にしようというコンセプトのもとで行われました。

まず、開催中の2日間で生まれた成果として、実行委員から2つの発表がありました。一つ目は会議中に起草された、『原発のない世界のための横浜宣言』。二つ目は会場に来たすべての人から生まれたアイデアや行動指針を集めたウェブサイト『行動の森 一ひとり一人にできること』です。横浜宣言では、宣言は8つの呼びかけによって構成され、実行委員は今後この内容に基づき行動していくことを発表しました。二つ目の「行動の森」は、今後もウェブサイトが継続し、一人一人が実践していくための場として残ることになります。発表した佐藤潤一さんは「この会議で明日から動くということを会場に来ていた半分の人と約束する」という自らの約束を発表の最後に実践。会場に、これだけ動く人がいるのだということを示しました。

続いて、この成果と会議を通じたコメントを6人の登壇者から頂きました。一人目の上野千鶴子さんは、会議で感じた成果として以下の3つのことが挙げました。1: 私達は原発がなくてもやっていける、2: 代替エネルギーは確実に手に入る、3: 私達はそれを選ぶことが出来る。上野さんはこの会場を埋めたのはここにいる一人一人の力で、だからこそ全員に拍手を贈り、一緒に行動しましょうと呼びかけ会場を盛り上げました。

二人目の宮台真司さんからは、上野さんの3つの成果を肯定した上で、原発をやめることと併せて「原発をやめられない社会をやめること」を提案。脱原発して自然エネルギーへ移行する社会は、大きな力に依存する社会から自治へと変わることと表裏一体だと指摘しました。

長く原発訴訟に関わってきた海渡雄一さんからは、日弁連を代表して今後東京電力の責任を明確化すること、被災者支援、健康にかかわることを訴訟、立法の面でサポートしていくことを明言。福島苦難を忘れず、二度と今回のような事故が繰り返されないよう闘っていくことを表明しました。

3月11日以降、福島の人たちに対する政府の対応から発言・行動を始めた山本太郎さんは、高濃度汚染地域に暮らす子どもたちを守ることを、放射性がれきの問題、避難の権利の3つをどうにかしなければいけない、と市民が立ち上がることの大切さを呼びかけました。特に、いまでも無関心でいる人たちと繋がること、関心を向けてもらうことが最重要だと力説しました。

開会イベントでも司会を務め、2日間を通して会議に参加した野中ともよさんは、この会議で戦後日本においての新しい会議の形をみたと評価。これからは消費社会から脱却し、「ここからが本当の民主主義の始まりだ」と呼びかけました。6人目の登壇者でマーシャル諸島から参加したアバッカ・アンジャン・マディソンさんは、自分たちの置かれた状況をどうしていいかわからない、そんな困惑の中で会議に参加している。その会議の中で出会った人々、実行委員会へ感謝を伝えたいとお話しし、世界中に存在する被ばく者の立場を明らかにしました。

閉会イベント最後のパートでは、3つの今後に繋がる動きが話されました。東アジアとして脱原発を目指す『東アジア脱原発・自然エネルギー311人宣言』では、3月11日に発表予定の311人の宣言者のうち200名を韓国・日本で集めた成果を発表。ソウル市長の応援メッセージビデオも上映されました。地方自治体の取り組みとして、浜岡原発から50キロの静岡市で市議を務める松谷清さんは、子どもを放射能被ばくから守るために自治体ができることを提案しました。

そして閉会イベント最後のスピーチは、南相馬市から出展団体としてこの会議に参加した、須藤栄治さんと、ドイツから参加したミランダ・シュラーズさんから。須藤さんは、福島の人たちも多く関わった会議で、福島の人同士が、日本中の動き出した人たちが、そして世界中からの参加者が「つながる場」ができたことの貴重さと大切さ語りました。それを受け「福島のことを世界に伝えます」とミランダさんが約束しました。

開会イベント「ふくしまから世界へ」にはじまり、閉会イベント「さあ、始めよう」で終えた二日間。会議中に生まれたネットワークや、相互交流、あらゆる世代の参加、そしてパシフィコ横浜を埋めた人の力が閉会イベントでは感じられました。この2日間で終わることなく、「可能性」と「熱気」を共有した一人一人が今後動いていくことを信じています。

